



行田の街なかを代表する 2つの国登録有形文化財



老舗和菓子店「十萬石」本店として知られる黒漆喰塗りの重厚な店舗、元々は呉服商山田清兵衛商店の店蔵として明治16年(1883)に棟上げされたもので、行田市内では珍しい江戸様式の店蔵である。昭和44年(1969)から十萬石の店舗となり、昭和53年に改修が行われて、外壁にナマコ壁が設けられた。

国登録有形文化財 十萬石ふくさや行田本店店舗

わがまち行田の魅力

行田支店 窓口課主任
宮崎 幸子



「埼玉県名発祥の地」である行田市は、数多くの史跡・文化財に恵まれ歴史感漂う城下町です。北に利根川、南に荒川が流れ古代より北埼玉地方の中心として栄えてきました。

歴史遺産の代表的なものとして、日本最大の円墳である丸墓山古墳がある「さきたま古墳群」や室町時代に築城された映画「のぼうの城」モデルの「忍城」は、先日、続日本100名城に選定され話題となりました。当店の建物も忍貯金銀行として昭和9年に竣工し、国の登録有形文化財に指定されています。また、ギネス世界記録に認定された「超巨大田んぼアート」、四季を通じて美しい植物が咲き誇る「古代蓮の里」など、四季折々の自然も楽しめます。

そして、行田と言えば足袋です。足袋づくり全盛時代のレトロな雰囲気が残る町並みで、今なお残る蔵などからは、古き良き時代の面影を垣間見ることができます。

最近では、「下町ロケット」で知られる池井戸潤さんの小説「陸王」の舞台が行田市です。老舗零細の足袋屋が社運を賭け、大挑戦する物語で、今秋から役所広司さんの主演でテレビ放映が決定しています。

以上のように自然豊かで古代からのロマンある歴史が息づき、また人情味溢れる街の人々が、どこか落ち着ける街の雰囲気を醸し出しています。

行田名物フライ&ゼリーフライを片手に、是非一度散策してください。

行田市駅前の通りと国道125号の交差点に位置する、県内でも数少ない戦前の鉄筋コンクリート造2階建ての本格的な銀行建築。忍貯金銀行の店舗として昭和9年(1934)に竣工、第二次世界大戦中は行田足袋元売販売株式会社に売却され、戦後は足袋会館(足袋組合の会館)となった。昭和44年(1969)から武蔵野銀行行田支店として使われている。2階の応接室は、昭和21年に昭和天皇行幸の際に昼食を摂られた。



国登録有形文化財 武蔵野銀行行田支店店舗

わたべたちが遊ぶまち

僕たちはここにいるよ



平成10年、行田市の中心を走る国道125号線の電線類地中化整備事業に伴い、歩道上に小さな櫓が建ちました。櫓の上には、童たちの姿を模した銅人形39体が可愛らしい表情で人びとを和ませています。



忍藩十万石の面影残る名城

おし じょう 忍 城

文明10年(1478)頃、地元の豪族 成田顕泰により築城された忍城は、関東7名城のひとつに数えられ、忍藩十万石の城下町の象徴である。忍城を語る上で欠かせないのが、天正18年(1590)豊臣秀吉の関東平定の際の石田三成の水攻めであろう。この水攻めに耐え抜いた城は、「忍の浮城」と称され、後に小説や映画化された「のぼうの城」の舞台として改めて多くの人が知るようになった。江戸時代に入ると徳川譜代や親藩の居城となり、寛永16年(1639)に老中阿部忠秋が入城し大改修に着手した。孫の正武は

忍城御三階櫓の建築、城門土塀の修築に力を入れるなど城下町の整備が行われた。明治維新後、明治4年(1871)に廃城となり明治6年(1873)に土塁の一部を残して取り壊された。

現在ある「忍城御三階櫓」は昭和63年に再建されたもので、内部は郷土博物館の展示室の一部となっている。平成29年(2017)続日本100名城(118番)に選定された。



PickUp 「足袋蔵のまち行田」 埼玉県内初の日本遺産へ



去る4月28日に文化庁により「足袋蔵のまち行田」が日本遺産に認定された。日本遺産は、地域の有形、無形の文化財をテーマに2015年より毎年認定されており、2017年が第3回目で合計54件となった。埼玉県内では初めての認定で、足袋の産地として、足袋蔵など歴史的建築物が残る趣きある景観が評価された。

行田市は江戸時代中頃から足袋づくりが盛んになり、明治20年代以降は足袋産業が発展した。最盛期の昭和10年代には、年間8,500万足、全国シェアの約8割を記録している。足袋の倉庫である足袋蔵は江戸時代後期には建て始められ、時代を追って、土蔵から石蔵、鉄骨煉瓦、鉄筋コンクリート、モルタル、木造など様々な蔵が建てられた。現在でも多様な足袋蔵が約80程度残っている。

